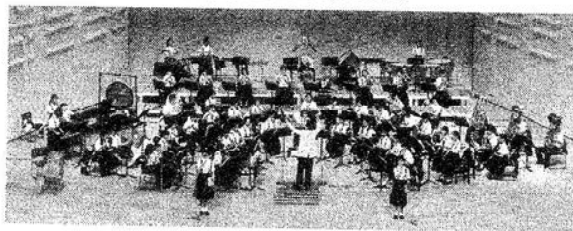


池袋中学校

池袋中学校は、戦後間もない昭和22年(1947年)4月28日に生まれました。現在の大塚台小学校の校舎を借り、生徒数189名、5学級での出発でした。翌年の昭和23年4月には旧池袋五丁目(現池袋本町四丁目)で校舎起工式が行われ、8月に木造平屋建ての校舎が完成して、できあがった7教室に1・2年生が移転しました。昭和24年4月には第2次の校舎が落成し、2階建ての11教室で全学年の生徒が学習できることになりました。



その後生徒数はどんどん増えつづけ、追いかけるように校舎の増築も行われました。昭和35年には鉄筋コンクリート造4階建ての現在の校舎ができあがりました。校舎の増築は15回にも及びます。生徒数は昭和37年には2300名、45学級となり、区内でも最大規模を誇る学校となりました。

池中の長い歴史の中でも特筆されるのは吹奏楽部の活躍です。平成6年3月、全日本アンサンブルコンテストで金賞を受賞し、続いて10月には全日本吹奏楽コンクールでも金賞を受賞しました。そして平成7年7月には、第7回世界吹奏楽大会に出場するという快挙をなしてげました。

サバイバル・ワンポイント講座 その6

手当てをする

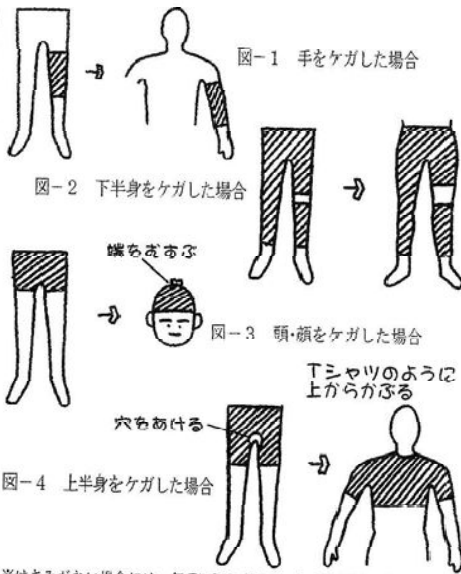


図-1 手をケガした場合

図-2 下半身をケガした場合

図-3 頭・顔をケガした場合

図-4 上半身をケガした場合

※はさみがない場合には、無理に切らずに余った部分がじゃまにならないようにまとめておきます。

平成5年1月に発生した釧路沖地震は、釧路市民の大部分が自宅にいる休日の夜10時ごろに発生した地震です。震度6の地震は死者2名、負傷者は1,000名近くを数えました。ケガをした人は、あわてて火を消そうとして火傷をしたり、割れたガラスなどで手や足を切ったりしたのです。ほとんどの人が家の中でケガをしています。地震後市内の病院は、ケガをした人が殺到して混乱しました。

こうした混乱を避けるためにもケガの手当ては、家庭や地域で行うことができるといいですね。みなさんのお宅でも救急箱に何本か包帯が入っていると思います。しかし災害時、包帯が足りなくなった時のためのワンポイントアドバイスです。

方法は簡単です。パンティストッキングを用意して下さい。(清潔なものであれば、使っているものや多少穴があいていても大丈夫です。)傷口にガーゼなどを当てて、それがずれないようにストッキングで固定します。そして左の図に沿って練習してみてください。

また、消防署では定期的に応急手当の講習会を行っています。ひとりでも参加できます。詳しい事は池袋消防署にお問い合わせください。(防災ネットワークプラン 井上 浩一)

池袋本町 防災まちづくり

no. 21

2001年4月27日発行

発行：池袋本町防災まちづくりの会
豊島区まちづくり推進課
問い合わせ先：
(財)豊島区街づくり公社
TEL 03-3981-4732
編集協力：(株)防災&都市づくり計画室

今年もJR職員住宅跡地で

恒例の池袋本町防災まちづくり祭も今年で5回目。毎年少しずつ新しい企画を盛り込みながら、楽しんで学ぶ防災訓練をめざしています。

今年の会場はJR職員住宅跡地。ここでは、池袋本町公園ではできないことができます。今年の新しい企画は、災害の時のテント村づくり。限られた材料でどんな仮設テントができるかお楽しみに。



昨年の投てき水バックによる消火の様子



第5回 池袋本町防災まちづくり祭

日時：5月20日(日) 10時～13時
場所：JR職員住宅跡地

- ①「見る」展示コーナー
 - ・子どもポスターコンクール「夢のJR跡地」
 - ・参加者が考える「JR跡地の公園づくり」
 - ・こんなに進んだ防災まちづくり
- ②「体験する」訓練コーナー
 - ・地震を体験する(起震車)
 - ・煙から逃げる(煙体験)
 - ・けが人を助ける(救急救命訓練・救助訓練)
 - ・火事を消す(ポンプ放水訓練・投てき水バック)
 - ・火災の様子を見る(発火体験訓練)
- ③「まわる」防災スタンプラリー
 - ・5つのポイントを廻った方に参加賞(花ポット)
- ④「食べる」模擬店コーナー
 - ・担当は宮元町会
- ⑤「生きのびる」サバイバル遊びコーナー
 - ・災害時を想定したテント村づくりなどなど
 - ・備蓄食料の試食
- ⑥ 文成小井戸広場 井戸開き

つれづれに一言
広島県南部で大きな地震が発生しました。規模はMw.9で阪神・淡路の地震と同じ6.9です。被災地の方々には心よりお見舞い申しあげます。こうした自然災害は科学技術の発達した現在でも予知は仲々困難で、突発的な出来事として往々に感じられ、対応する防災体制の不備等が指摘されております。しかし理論的に考えてみますと、日本列島は全海洋の半分を占める太平洋の中に位置し、その膨大なエネルギーをまともに受けて、プレートの変動や活断層の生成に影響を与え、加えて火山が多く、災害のフアクトリーの多い地域という認識が必要です。このことは災害は日常的に存在するものと位置付け、防災施設やシステム等のインフラの整備は勿論ですが、自分や近隣を見つめ、発生時にはどのように対応すべきか、最低限の行動基準を決めておく必要があります。(浜田)